

ごあいさつ

本展は、福岡を拠点に戦後日本の前衛美術を牽引した徳島ゆかりの作家、菊畠茂久馬（1935～2020）が没してから5年の節目を迎えるに当たり、全国の美術館が、自館が所蔵する菊畠の作品を展示する「LINKS－菊畠茂久馬」プロジェクトの一環として開催するものです。

菊畠は、徳島県海部郡由岐町（現・美波町）出身の父親と、長崎県五島市出身の母親の間に生まれました。幼い頃から絵画を好み、1957年に福岡の前衛美術集団「九州派」に加わり、60年代の反芸術運動の旗手として頭角を現します。初期に手がけた〈奴隸系図〉、〈ルーレット〉シリーズは、抽象表現やネオダダなど同時代の美術動向の影響を受けつつも、作家独自のエネルギーが逆る斬新な表現と目され、世界的な注目を集めました。

しかし、1964年の東京オリンピック、70年の大阪万博開催に沸き立ち、その喧騒へなだれ込む日本の文化状況に強い抵抗を覚えた菊畠は、60年代から80年代初頭まで十余年もの間、公に作品を発表する機会を極端に減らし、美術界と距離を置くようになります。この“沈黙”の時期に、菊畠は地元の福岡で戦争記録画や筑豊の炭坑画家、山本作兵衛との出会いを通じた思索と並行して、日常的な素材を組み合わせたオブジェの制作に着手します。そして、それらのオブジェを平面化する試みとして、版画に取り組みました。さらに1980年代以降、キャンバスに棒状の物体を取り付け、表面を絵具で塗り込めた〈天動説〉をはじめ、〈月光〉、〈月宮〉など大型作品のシリーズを発表しています。

本展では、気鋭の美術家として将来を嘱望されながらも制作の現場から遠ざかり、オブジェの制作を通して「もの」と向き合い、重厚な大型作品のシリーズを生み出すに至った作家の足跡を、1960～80年代にかけて制作された当館の所蔵作品によって振り返ります。

徳島県立近代美術館



菊畠茂久馬没後5周年企画

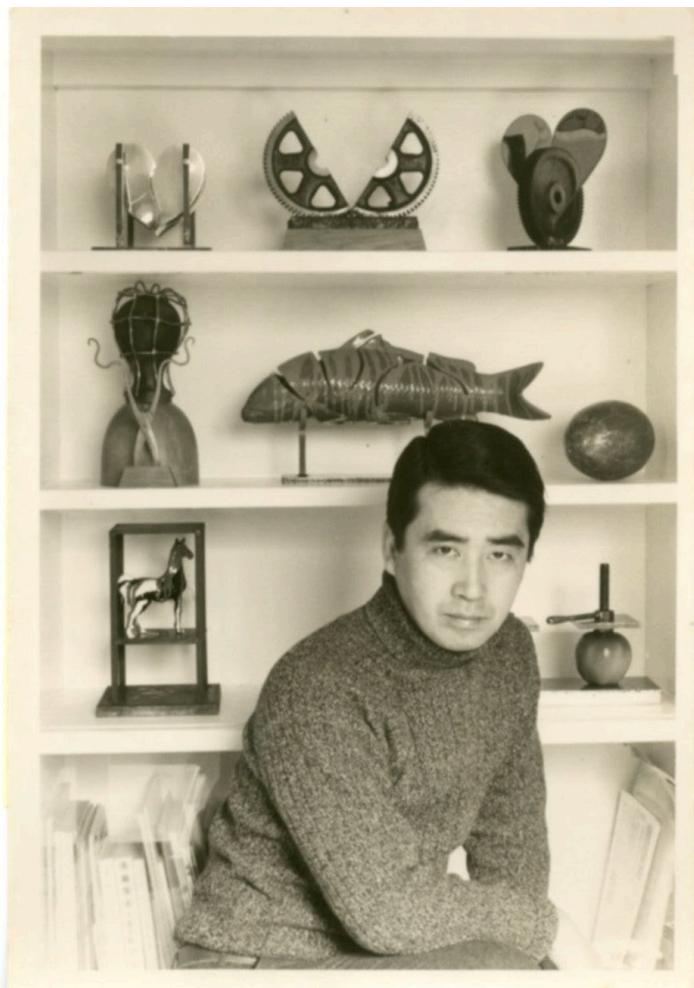
LINKS- 菊畠茂久馬

福岡を陣地に、自前の「絵画」を目指した画家の軌跡を追う

「LINKS- 菊畠茂久馬」とは、菊畠作品を所蔵する美術館10数館からご協力の元、所蔵の菊畠作品を各館主催の展覧会の中で展示していただき、その情報を横断的につないで発信するプロジェクトです。日本の現代美術史の中で独特の位置を占めている彼の足跡と作品を今一度確認し、再評価のきっかけとするための試みです。

下記の2次元バーコードから、本企画や菊畠茂久馬に関する情報を
ご覧いただくことができます。





菊畠茂久馬 肖像写真(1974~77年頃)

菊畠茂久馬(1935~2020)

長崎市に生まれる。本籍地は徳島県海部郡由岐町(現・美波町)。幼少期に福岡へ移る。1953年、福岡県立中央高等学校を卒業。1957年、福岡の前衛美術集団「九州派」に加わり、1960年代の反芸術運動の旗手として国内外で活躍。1970年代は美術界と距離を置き、戦争記録画や筑豊の炭坑画家、山本作兵衛の執筆活動を行う傍ら、オブジェと版画を集中的に制作。1980年代以降、〈天動説〉〈月光〉など大型タブロー作品のシリーズを次々に発表し、新たな画境を開いた。福岡県文化賞、西日本文化賞、毎日芸術賞など、受賞多数。

九州派結成、個展開催まで

早くに両親を亡くした菊畑は、高校を卒業後、福岡市の百貨店で楽焼の絵付けの仕事に従事しながら本格的な制作を開始します。第24回独立美術展に入選を果たした1956年、福岡市内で開かれた野外展「ペルソナ」で桜井孝身、オチ・オサムらと出会い、57年に旗揚げした九州派の主要メンバーとなりました。

結成当時、福岡では三井三池炭鉱をはじめ各地で労働争議が発生し、九州派の画家たちの多くも労働運動に関わっていました。彼らは、人々の生活と芸術を結びつけることを旨とし、アスファルトやコールタールなど堅牢な素材を用いて、泥臭く生活感のあふれる作品を制作しました。菊畑もまたその強い影響下にあって、福岡を拠点にしつつ、読売アンデパンダン展など自由出品、無鑑査形式の展覧会にも出品していました。

そして1962年、転機が訪れます。現代美術を取り扱う東京の南画廊からのオファーで初めて個展を開き、中央のアートシーンに華々しくデビューしたのです。〈奴隸系図—円鏡による〉シリーズは、丸型に成形した物体を赤や黒色の塗料で彩色し、その面に歯医者から貰い受けたという歯を取り付けたり、一部に焦げ跡を残した作品です。虫食いのような痕跡や歯の醸し出す生々しさは、九州派の土俗的な表現に通じます。

続く1964年、同画廊での2回目の個展で、材木の支持体に様々な廃品を取り合わせた〈ルーレット〉シリーズを発表します。大量生産、消費時代を迎えた1960年代、身の回りにあふれる既製品を用いて大衆文化と美術の接触を試みる動向が、米国を中心に巻き起こりました。菊畑は、こうした同時代の美術の潮流をとらえた新進作家として高く評価され、その後も東京の個展やグループ展で精力的に活動し、反芸術を代表する作家の一人と目されるようになっていきます。

しかし、自身の作品にあふれていた「もの」をどのように平面の絵画へと取り込むかという問題が大きな障壁となり、次第に九州派や南画廊とも距離を置き、制作の現場から離れていくこととなりました。

オブジェと版画

高度経済成長期、東京オリンピックや大阪万博の事業に多くの芸術家がこぞって参加する中、菊畑は冷静にそうした文化状況を観察しながら、絵画とは何なのかと改めて自問し、福岡の地で思索に耽ります。

この時期、菊畑は戦争記録画や筑豊の炭坑画家、山本作兵衛に関する執筆活動を行う傍ら、東京で私塾「美学校」の講師を務めています。同校では山本の炭坑記録画の模写に取り組み、国家や社会情勢など時代の推移によって変化する「外部」と、変わることのない画家の「内部」のあり方への省察を深めていきました。

こうした仕事と並行して、それまで「もの」を主体に用いてきた菊畑は、平面の作品を制作するためには「もの」を克服しなければならないと考え、1968年から十余年にわたりオブジェの制作に取り組みます。これらは「もの」の初源を掘もうとする発想から生まれ、将来的に再び絵を描くためのプロセスとして制作されたといいます。当初、200点以上制作されたものの、発表を前提にした作品ではなかつたため、改作と廃棄が繰り返されました。今日、100点が現存しています(内96点が当館蔵)。

菊畑は、オブジェを徹底的に個の問題を追究するための「原器」、「新しい自然」と称し、それを撮影して版画化しました。この工程は、立体物である「もの」を平面に落とし込む試みであり、オブジェの制作を通じて、自身の作品に多用してきた「もの」からの脱却を目指しました。

〈版画集 天動説 其の一〉と〈版画集 オブジェデッサン〉では、オブジェの写真が版画に置き換えられています。なお天動説という呼称はこの頃、立体のオブジェが発するエネルギーをどのように平面に落とし込むのかという意識の下、オブジェや版画に限らず試行錯誤を重ねた作品群に付されたもので、同題の油彩画も制作されました。菊畑にとってこの“沈黙”的な時期は、1980年代より始まる大型タブロー作品シリーズの制作へと展開するまでの雌伏の時でもありました。

大型タブロー作品

1983年、菊畑は実に19年ぶりとなる個展を開き、大型のタブロー作品〈天動説〉を8点出品します。画面全体が灰色で厚く塗り込められ、表面に取り付けられた棒状の物体と周囲に浮かぶ幾筋の波紋のような形態が、異様な存在感を放っています。この連作について菊畑は「莊重な交響曲が天にとどろくような組作品をもくろんだ」と述べていますが、「もの」と平面のせめぎ合いが繰り広げられる画面は、荒々しさと静けさが拮抗するような緊張感をたたえています。本シリーズは、1984-85年に8点が追加され全16点組となりましたが、菊畑は金網を取り付けたり、画布を切り裂くだけに留めておくなど悪戦苦闘したといいます。

それから間もなく発表された〈月光〉シリーズ(全16点)では、画面から棒状の物体が姿を消し、代わりに瘡蓋のように盛り上がった形態が現れます。そして、画面全体を灰色がかかった青色の絵具で入念に彩色しています。ここにおいて初めて登場する暗い青色は、菊畑が長崎県の五島列島で過ごした少年時代、脳裏に焼き付いた海の記憶を鮮明に映し出したものだといいます。漁師の父を持ち、母の故郷で多感な時期を過ごした菊畑にとって海は大切なモチーフであり、自身の出自に関わる原風景でもありました。

続く〈月宮〉シリーズ(全12点)は当初、〈海〉の連作として構想されましたが、制作段階で変更され、やはり〈月光〉同様、深い青色を基調とした画面を踏襲しつつ、画辺上方から絵具が滴り落ちるかのような構成を取ります。注目すべきは〈月宮第七番〉に見るよう、画面左右に白や肌色系の色斑が現れている点です。画面の垂直性を強調しながら何らかの事物が立ち現れてくる気配をもたらしており、〈天河〉、〈春風〉(本展未出品)など後年の新たなシリーズへの展開を予感させるものです。

これらの大型タブローの作品群はいずれも菊畑が画家として、一人の人間として自身の「内部」を表現しようと格闘した軌跡であり、圧倒的なマチエールと量感をもって、作品を鑑賞する私たちにも深い思考を促します。